

自然誌 だり 春

Natural history

三重自然誌の会情報誌 140号

2024年 6月

オオサンショウウオ雑種，特定外来生物指定

オオサンショウウオについて，チュウゴク種とそれらとの雑種が，外来生物法に基づく特定外来生物に指定されることが5月28日に環境省から発表されました．在来種オオサンショウウオは特別天然記念物として保護される一方で，雑種が駆除されることに合点がいかない方もおみえかと思います．指定理由の中心は，在来種を絶滅に追いやってしまうことです．赤目四十八滝にも雑種が生息していることから，名張市では2013年度から対策事業を実施しており，昨年度末には報告書も刊行されています(三重自然誌の会編2023. オオサンショウウオ緊急調査報告書)．私も，この事業に当初から関わっていますが，開始当初には，滝沿いの遊歩道を歩くと日中にもオオサンショウウオを目撃することがけっこうあり，千手滝にあった茶屋の方がおでんのちくわで餌付けもしていました．事業が進むとそれらが姿を消して，茶屋のおばちゃんから「あんたが来てからオオサンショウウオがおらんようになったわ」と誉め言葉をいただきました．そうです．これらの個体はすべて雑種だったのです．彼らは昼夜採餌することにより(在来種は夜行性)，スクスクと成長して在来種を駆逐していきます．名張市では，川から取り上げた雑種オオサンショウウオ約150匹を廃校のプールで飼育していますので，外来種問題を考える上で，一度は見学されることをお勧めします．



保護池(名張市郷土資料館，同市安部田)．計測中のため水を抜いており，古タイヤがお気に入りの隠れ家になっている．

(清水 善吉：松阪市日丘町 1386-17)

見慣れないクローバー明和町に侵入か？

中 野 環

現在、シロツメクサの白い花が咲く風景は、あたりまえの光景になっています。シロツメクサは、マメ科シャジクソウ属 *Trifolium* に属するヨーロッパ原産の植物で、江戸時代以降に乾燥した植物体を交易の際に荷の詰め物として使われたことで日本に侵入したようです。*Trifolium* 属の仲間は、英語でクローバー (Clover) と総称することから、私たちは4枚の葉をつけたシロツメクサを四葉のクローバーと呼んだりします。今回、明和町で、園芸種または外来種と思われる野生では見慣れないクローバーが自生しているのをみつけたので報告します。

2024年2月22日、斎宮駅から斎宮歴史博物館に向かう途中にある上園芝生公園付近の畑地に生えるシロツメクサの群落に目をやると、一角だけ色が淡いところがあることに気がつきました (写真1)。農薬散布などで衰弱した状態なのかと思ったのですが、近づくとも見慣れない模様のあるクローバーでした (写真2)。更にその脇には葉全体に斑が入るシロツメクサがみられました (写真3)。まわりに生えている多くのシロツメクサは、葉の中央付近に葉縁の形に対応するかのようには弧状に斑が入っていますが (写真4)、全く斑が入らないものも見られました (写真5)。見慣れないクローバーは、高松商事 (茨城県神栖市) から発売されているプリンセスクローバーの *Trifolium leonore* に似ています。ホームページには、北欧で育種されたグリーン系のクローバーで、耐寒性が高い品種とあります。今回、プリンセスクローバーに似た株を確認した付近には民家は少なく、ガーデニングをしている雰囲気ありませんでしたが、どこかで植栽されていた株から種が拡散されて野生で増えたのかもしれませんが、現時点で確認したのは約50cm×100cm程の範囲が中心ですが、そこから左右に5mほど離れた場所にも、それぞれ10cm×10cm程の範囲に生えています。3月初旬に刈り取りが行われましたが、3月26日に再び現地を訪れると新たに葉を広げていました (写真6)。また、葉全体に斑が入るシロツメクサはプリンセスクローバーのような植物の近くにかたまって生えているのですが、4月8日には、100mほど南側に位置する場所に数10株が生えているのをみつけました。単なるシロツメクサなのか、それとも交配種や別種なのか気になります。外来種は、侵入すると急速に分布域が広がることは少なくないので (山本2023,2024)、引き続き経過を観察したいと思います。

文献

山本和彦2023. 東紀州に出現したジャンボ植物, ヨシススキ (その1). 自然誌だより, (138), 6-8.

山本和彦2024. 東紀州に出現したジャンボ植物, ヨシススキ (その2). 自然誌だより, (139), 6-7.



写真1 上園芝生公園付近に生えるクローバー (2024年2月22日)



写真2 プリンセスクローバー



写真3 葉全体に斑が入るシロツメクサ



写真4 葉の中央付近に斑が入るシロツメクサ



写真5 斑が入らないシロツメクサ



写真6 再び伸び始めたクローバー (2024年3月26日)

(なかの たまき：度会町大野木 1711-1)

津市高茶屋のホンドギツネ

秋 田 勝 己

2024年2月7日、23時40分頃、津市高茶屋7丁目の自宅近くで、ホンドギツネ（以下キツネ）の真新しい死骸を見た（写真1）。直前に自動車にはねられたのだろう。

持ち帰って、ノミとか探してみようか、と思ったのだけど、持ち帰るための大きなビニル袋はないし、こんなもの狭いアパートに持ち込んだら、家人に怒られそうだから、やめた。翌朝、同じ場所を通ったけど、片づけられてしまったらしく、死骸は残っていなかった。

3年ほど前から、年に1～2回だけど、夜間このあたりでキツネを見ている。キツネが姿を見せるようになってから、近所にたくさんいたネコが全く見られなくなった。昼間、街中の地表で採餌するスズメやセキレイ類にとっては、キツネ（昼間は街中に出てこない）の進出は、プラスに働いてるものと思う。

僕の実家は津市久居東鷹跡町にある。古い小さな城下町だけど、すぐ近くには雲出川の段丘崖が続いていて、線状にシイやタブを主体とした常緑樹林が連続する。僕は子供の頃からここに住んでいるが、1960～2000年代初めには、このあたりでキツネを見かけることも痕跡を見ることも全くなかった。しかし、昭和6年生まれの子供の父が子供のころ（80年ほど前か）には、町には出てこないものの、キツネはいて、たまに鳴き声をきいたという。比較的近いところに『狐塚』という地名も残るから、昔は身近な動物だったのだろう。



写真1 ホンドギツネの死体（2024年2月7日、津市高茶屋7丁目）

5～6年前の深夜、近鉄久居駅から100mも離れていない完全な市街地でキツネを見かけて大いに驚いたものだ。その後、久居でも、深夜に車を走らせていると年に1～2回のペースで目撃する。タヌキよりだいぶ遅れて市街地にも進出しつつあるこの動物、これから、その生活をどう変化させていくのだろう。北海道のキツネみたいに、人馴れしてしまうのだろうか。

（あきた かつみ：津市高茶屋7丁目）

タカチホヘビを伊勢市の宮川川原で確認

タカチホヘビは、夜行性のヘビで日中は倒木や石の下、落ち葉の中などに隠れているため、偶然に目撃する機会は稀である。そのためか、全国の県版レッドリストの多くに掲載されているが、探せば意外と見つかるヘビでもある。県内でも、過去の記録がすべて森林内であったので、山のヘビかと思っていたら、宮川の川原、それも河口に近い伊勢市川端町地内において生息を確認したので記録しておく。2024年5月12日、河川敷内の幅1.5mほどの舗装道路上で死体を拾得した（写真1）。体は扁平に潰れていたことから自動車にひかれたものと思われる。一帯は、草地と林がモザイク状にあり、その林内が彼らの生息場所となっているのであろう。



写真1 タカチホヘビ。2024年5月12日、伊勢市川端町

（清水 善吉：松阪市日丘町1386-17）

松阪市四郷池湿地管理の状況 (5) ～イシモチソウは爆発的に増えた～

谷 口 雅 仁

松阪農業公園ベルファーム内にある四郷池の湿地管理を始めて10年目となりましたので、現在の状況をいくつかお伝えしていきたいと思います。

湿地管理の方法は、これまでと同じように年間2-3回程度の草刈りと2月頃に行う野焼きですが、侵入してきているヨシやクズ、セイタカアワダチソウなどを選択的に取り除いたりもしています。野焼き前の冬の草刈りは、11月頃まで花を咲かせているイヌセンブリやリンドウなどがあるため、なるべく遅い12月～1月頃に実施するようにしています。

ここ2-3年で気が付いている変化は、イシモチソウが爆発的に増えてきていることです。この湿地の管理を始めた当初は、数m四方の範囲に4株程度しか確認できなかったものが、現在では25×10mくらいの範囲に200株以上はあろうかという勢いで増えて来ています。これまで気が付かなかったものがあつたのかも分かりませんが、やはりこれは草があまり伸びすぎないように管理してきた成果ではないかと思っています。

また、イシモチソウが増えてきている場所を見て気付いたのですが、イシモチソウはあまり湿気の多い場所を好まないということです。これは意外な気がしますが、表土剥ぎをした場所など雨が降ると水が溜まるような場所では芽生えはあっても大きな株に成長することはないようです。むしろ、この湿地の中でもやや乾燥気味の場所に増えてきているように見えます。近縁のトウカイコモウセンゴケは、表土剥ぎをした場所や湿気の多い場所を好んで生育していますので、少し不思議な気がしています。

では、イシモチソウがどうやって増えてきているかということですが、写真1の芽生えの様子などを見ると、種子が周りにこぼれて小さな株が芽生えてきているように見えます。しかし、何mも離れた場所にポツンと小さな株が育ってくることもありますので、種子が風や昆虫などによって運ばれるとか、あるいは条件が整って埋土種子が発芽してくるというようなこともあるのかも分かりません。観察を続けていきたいと思います。

※湿地管理のお手伝いは大歓迎ですので、興味のある方は是非お知らせください。

e-mail : gajin@mctv.ne.jp



写真1 イシモチソウの芽生え (2024.04.10)



写真2 イシモチソウの群落 (2024.05.07)

(たにぐち まさひと：松阪市小阿坂町4038-2)

鈴鹿青少年の森湿地の25年

清水 善吉

鈴鹿青少年の森は、鈴鹿市住吉町地内にあり、明治100年を記念して1972年に開園した県営の都市公園です。道伯池を中心とした約51aの丘陵地に、広場や散策路が設けられ、また、公園という性格上、管理が行き届いていることから里山的環境が残されており、生きもの観察の場としても利用されています。その一画に湿地がみられ、当会も設立間もない1995年に、湿地植物の観察会を実施しています。

その湿地では、現在は公園管理者によって春と秋に植物観察会（写真1）、冬には除草等の管理作業がイベントとして実施されており、貴重な自然資源としてのある程度の位置づけになっていますが、過去には存続が危ぶまれる時期もありました。経緯については、これまでも本誌上で紹介してきましたが（87・107・110号等）、今回、改めて整理をしておきたいと思います。

湿地対策工事発覚

2000年5月8日に別用で同公園を訪れると、湿地の一番低い山裾に沿って幅・深さ1mほどの溝が掘られ、横の側溝に排水口をつけて砕石で埋め戻す工事を実施していました（写真2）。湿地の水はけを良くして、雨天時に芝生広場に水が流れ込むのを防ぐ工事との説明がありました。県担当者、シラタマホシクサやサギソウなどの湿地植物が生育する貴重に場所であることを説明したところ、工事をいったん中断し、改善策を検討してくれることになりました。

シラタマホシクサ植栽事件

2000年秋、湿地を訪れると立派なシラタマホシクサが目を見せました。よく見ると30cm四方のマットから一株生育しており、5～6マットあったと記憶しています。そのうちの一つに、プラスチックのプレートが付されており（写真3）、園芸品が植栽されたものとわかりました。植栽された方は善意であったことは間違いありませんが、当湿地産ではないと思われることから、管理者にお願いして撤去してもらいました。ただ、このように方がみえることは、少し嬉しかったです。

改良版工事実施

2001年1月から再び工事が始まりました。溝の砕石は除去して土で埋め戻し、山裾をやや高くして貯水能力を高めるとともに、芝生広場の手前に浅い溝をいれて、雨天時にあふれ出た水が広場に流れ込まないように工夫をしました（写真4）。この一件を契機に、湿地を維持していくという責務を、勝手にですが私が負うことになりました。



写真1 春の湿地植物観察会（2019年6月8日）



写真2 排水対策工事直後の湿地（2000年5月8日）



写真3 湿地内に植えられたシラタマホシクサ（2000年秋）

湿地管理開始

青少年の森は、鈴鹿サーキットや市街地のなかに取り残された孤島のようなもので、湿地への水分供給が十分ではないようです。そのため、植生遷移の進行が早く、放置すれば森林に移行していくことは必至の状況でした。そこで、遷移の進行をとめるために年1回の草刈作業を行うことにし、県・管理者に申し入れました。2000～2002年度は一人ではそぼそと行っていました。当然面白くなく、はかどりませんので当会会員さんに呼びかけたところ、2004年2月28日に実施した作業には、口伝で来てくれた鈴鹿市民も含めて10人ほどの参加を得ることができました。刈った草をそのまま放置すると翌春の発芽を抑制しますし、湿地の富栄養化を招きますので運び出すことにしましたが、これがなかなかの重労働で難儀しました（写真5）。

中断と再開

2005年から2009年度の5年間は、私の転勤により管理作業を中断してしまい、その間に遷移は大きく進んでおり（写真6、7）、作業の必要性を痛感しました。再開は2010年度からで、2011年度の参加者数は5人という最小を記録しましたが、2013年度には県・管理者の方々の参加があり、2014年度から春・秋の植物観察会とともに公園のイベントとして管理作業が実施されるようになり、毎回30人前後の参加者となり（写真8）、作業が各段にはかどるようになりました。

湿地の拡大

草刈作業にゆとりが出てきたので、湿地面積の拡大を図ることにしました。まず、湿地の南側は又



写真4 排水対策工事改良版実施中(2001年1月23日)



写真5 刈った草の運びだし作業(2004年2月28日)



写真6 放置前の湿地(2006年5月19日)



写真7 5年放置後の湿地(2010年5月29日)



写真8 管理作業参加者の皆さん(2015年1月4日)



写真9 重機をつかったの除草作業(2016年1月23日)

マガヤによって湿地植物の発芽が阻害されていたので、2015年度の作業時に重機を使ってはいでもらうことにしました（写真9）。ただ、大きな重機では自重で沈んでしまうため小型重機を用いたところ、ややパワー不足の感は否めませんでした。あわせて、人力により表土をはがして、植生変化を調べることにしました。これらの調査は、三重大学教育学部生物学教室の平山大輔先生や学生さんが中心になって行いました。三重大学による植生調査はテーマを変えて現在も継続中です。

また、湿地内に生育しているイヌツゲ等の樹木は基本的に伐採し、林縁部に繁茂しているコシダ等の植生を除去することで、湿地の拡大を進めています。こちらも現在進行中ですが、当初の面積の倍程度には拡大しています。

サッカー場建設問題

湿地に隣接する森を切り開いてサッカー場をつくる構想が2011年度に持ち上がりました。市民の憩いの場となっている公園を選ぶことには理解しがたいものがありましたが、当時の県知事・鈴鹿市長が満面の笑みで「推進する」というコメントをマスコミに発表していました。当然、市民の反対もありましたし、当会も湿地保全の観点から、水脈調査の必要性等の要望を知事と市長に提出しました。要望書に「微力ながら湿地保全のために協力させていただく用意がある」と書いたのが悪かったのか、鈴鹿市の担当者から電話があり、現地で湿地植物の保全について協議したいとのことでした。

出向いてみると、工事会社と環境コンサル、鈴鹿市、三重県の担当者が集まっており、工事区域の希少植物の移植地の場所が問題とされました。要望書では「工事予定地内の希少生物の移植先は新たに創出した湿地環境とする」としていましたので、理由を説明したのですが、市の担当が不満顔で県担当に「公園内の適地」ではいけないのかと聞いていたのが印象に残っています。県担当者に即座に拒否されていましたが。

もうひとつの要望である「地下水脈の調査を行い、工事が湿地に影響を及ぼさないことを確認する」ことについては、斜面の向きからの判断だけで、影響ないの一点張りでした。埒があかないので、影響が確認された時点で工事は中断と伝えて、平山先生に相談したところ地下水脈調査を実施してくれることになりました（写真10）。その調査は現在も継続中です。

そのサッカー場工事ですが、2022年2月9日から着工の運びとなっていましたが、市民の反対運動やチーム・運営会社のゴタゴタがあったりして延び延びとなり、結局は中止となりました。

植物相

湿地内の植物については、市川正人さんと山脇和也さんの調査結果が本誌87号に掲載されています。それによると、86種の生育が確認され、そのなかには絶滅危惧種13種、ミズギクのように県内では稀な種も含まれています。湿地管理の作業にあわせて継続的に植生調査を実施したわけでは



写真10 三重大学教育学部平山研究室による地下水脈調査



写真11 トキソウ（2022年6月4日）



写真12 シラタマホシクサ（2021年10月23日）

ありませんが、初夏のトキソウ（写真11）や秋のシラタマホシクサ（写真12）は増加しており、とくに後者は湿地いっばいに咲き誇る全国有数の規模で、見ごたえのある景観となります。国の天然記念物に指定されている「金生水沼沢植物群落（地同市子町）」と遜色のない植物相となっていますので、こちらも天然記念物指定をして将来に残していくことは行政の責務でしょう。

バトンタッチ

25年間にわたって関わってきた湿地ですが、私たち世代がいつまでもお付き合いすることはできません。そのような思案をしていたところ、三重県環境保全事業団（津市）の細川健太郎さんと峯和也さんが名乗りをあげてくれました。これからは、若いお二人が中心となって湿地管理を進めることになっています。よろしくお願いいたします。

自然は未来の人たちからの預かりものと言われます。自然の時間からみればわずかな期間ではありましたが、貴重な湿地を将来世代に渡す橋渡しをできたことは幸運でした（写真13）。もちろん、私だけでなし得たことではありません。作業に参加された会員・市民の皆さん、青少年の森管理者や県職員の方々、そして市川正人さん、山本和彦さん、平山大輔さんには植物分野について、上田利彦さんには管轄部署との調整を担ってもらいました。皆さん、お疲れさまでした。



写真13 湿地の現況（2024年6月7日）

事務局から

○三県交流フィールドワーク「奥香肌峡」の実施

5月18-19日の日程で、松阪市飯高町の宮の谷と木屋谷をフィールドに実施しました。18人の参加がありましたが、昨年に続いて奈良県からの参加はなく、3県の枠組みの見直しの時期に来ているのかもしれません。また、夜の懇親会時に、紀伊半島の自然の楽しさを紹介する本をつくってはどうかということになり、各県でいちど話し合いを持つことになりました。



編集後記

本誌は、2頁以内の原稿であることを原則としていますが、青少年の森の湿地ネタで4頁も使ってしまった。終活として25年の記録をある程度は詳細に残したかったことと、原稿の不足が原因です。次号は9月発行ですので、ご投稿をお待ちしています（善）。

自然誌だより140号 Mie Natural History Research Group News, No.140

発行日 2024年6月20日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp